

氏名 鈴木清史

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第65号

学位授与の日付 平成6年3月24日

学位授与の要件 文化科学研究科 比較文化学専攻

学位規則第4条第1項該当

学位論文題目 シドニーにおける都市アボリジニの研究
伝統と民族の創出

論文審査委員 主査 教授 松原正毅

教授 石毛直道

教授 熊倉功夫

教授 松本博之（大阪教育大学）

助教授 細川弘明（佐賀大学）

論文内容の要旨

アボリジニは、オーストラリア大陸の先住民である。1788年、英国が植民地をおくまで、600以上の部族と言語集団に分かれ狩猟採集生活をおくっていた。しかし白人との接触の結果、社会が壊滅状態になるほどの抑圧をうけてきた。その過程で混血がすすみ、生地を追われ、伝統文化を剥奪された都市に住むアボリジニが誕生した。今日では狩猟採集経済の伝統を強く残す辺境のアボリジニと都市的環境のなかで暮らすアボリジニにはっきりと二極化している。1986年の国勢調査ではアボリジニの人口は約206,000人であるが、辺境アボリジニは40,000人にみたく、残余はすべて後者にはいる。

本研究は、今日の都市部のアボリジニのあいだにみられる運動—エスニシティとしての「アボリジナリティ」の創出—と、それをひろめ継続させようとする「アボリジニ文化」学習の背景と実態をさぐるものである。調査の場所として選んだのはこの運動の中心のひとつであるシドニーである。

第1章では、アボリジニが都市化した歴史的経緯を中心に従来の研究のあり方とその問題点を整理し、本研究のねらいをのべた。

第2章では、シドニーにおける今日のアボリジニの概況をしめした。アボリジニの人口数は少なく、その居住地は市の全域に分散しており、移民や少数民族によくみられる集住地区をほとんどもたない。また、社会的・文化的特性としての、職種、住居、服装、習慣、宗教などは、平均的オーストラリア市民のもので、かれら自身も「白人とかわらない」という認識をもっている。

しかしながら、かれらはアボリジニであることで差別されてきたが、逆にアボリジニであることを主張し始めると、混血で白人的な外見をしているので「本物ではない」といわれる。これが都市部のアボリジニのもっともおおきな問題点であり苦悩なのである。

第3章では、まずアボリジニをめぐる社会状況の歴史的変遷をのべた。アボリジニにたいする社会環境は時代をおうごとに寛容になってきている。その時間的経緯をみるために、(1)アボリジニの都市化が始まった1950年代に移住してきた男性、(2)社会運動がもっとも活発だった1970年代に思春期を過ごした男性、(3)1990年代の大学教育をうけているシドニー生まれの青年の3人の男性と、(4)現在白人の配偶者をもつアボリジニ女性のシドニーでの生活史をとりあげた。

その結果、1970年代以降、アボリジニであることはかくすべきものから、抵抗の根拠へとおおきく変化したことがわかった。今日では、差別観が利得を生みだす要因となり、アボリジニであると主張することが権利拡大のための武器となっている。

第4章は、アボリジナリティと文化学習について考察した。シドニーのアボリジニの考えるアボリジナリティは、従来の民族誌を中心とする研究でのべられてきたものと、あまりかわるものではなかった。大学や専門学校(ダンス・スクール)の教育内容をみると、現在も狩猟採集を基盤とする生活を営む辺境のアボリジニの生活と文化を理想化し、地域や部族の相違を無視して、その文化要素を恣意的に抽出することによってアボリジニ文化を構築している。しかも要素は絵画、音楽、舞踊などの表象的なものがほとんどで、かれらのいうアボリジニ文化は、脱コンテクスト化して実質に欠ける。そのため、辺境のアボリジニは、都市のアボリジニとその文化を虚構あるいはすくなくとも同列にあるものとみ

なしていない。

したがって、都市のアボリジニの文化学習運動とは、自らのアボリジナリティを確立し、認識を強化し、次世代に伝えるためにおこなっている努力であり、真の意味での文化復興ではなく、生活の実態にそった伝統の創造だといえるだろう。それにもとづいて、都市部のアボリジニは、まったくあたらしい民族集団の形成にむかっての歩みを始めていると考えられるのである。

論文の審査結果の要旨

オーストラリアにおける先住民アボリジニの民族学的研究には、あつち蓄積がみられる。従来のアボリジニ研究の重心は、どちらかといえば「辺境」の伝統的文化を保持する集団におかれていた。1986年の統計によれば、約20万人のアボリジニのなかで16万人以上が都市部に居住するとされる。この都市部に居住するアボリジニ (Urban Aboriginals) にたいする民族学的研究は、最近になって展開をみはじめた領域といえる。鈴木清史の論文は、都市アボリジニを「民族の創出」というあたらしい視角からとりあつちつたものである。鈴木は、シドニーに居住するアボリジニを研究対象として選択している。

1788年オーストラリアが英国の植民地となって以来、先住民のアボリジニは壊滅状態にいたるまでの悲惨な運命をたどった。この論文においては、白人との関係におけるアボリジニの酷烈な歴史が具体的に記述されている。1967年の国民投票の結果、アボリジニははじめてオーストラリア国民とみとめられた。1970年代以降は、アボリジニ自身によるプロテストと社会的権利要求の運動がひろく展開する。この過程のなかで、都市アボリジニを中心としたみずからのアイデンティティを確立する運動がうまれてくる。これは、アボリジナリティを探求するうごきに直結する。アボリジナリティを探求するうごきは、都市アボリジニを「伝統的」なアボリジニ文化の学習へとむかわせる。絵画や音楽、舞踊などを中心としたアボリジニ文化の学習を通じて、みずからのアボリジナリティを確立しようとしているわけである。鈴木は、このアボリジニ文化学習運動のなかに、辺境のアボリジニと生活の位相を異にするところでの都市アボリジニによる「伝統の創造」の努力をみようとする。さらに、鈴木は、伝統の創造の努力のうえに都市アボリジニというあたらしい民族集団の形成へとむかう方向性を指摘する。

本論文の記述において、シドニーのアボリジニの生活史をとりあつちつた部分の比重がおおきい。比重がおおきいにもかかわらず、資料としての生活史の記述を簡略化しすぎたために論述のふくらみが欠如したきらいがある。アボリジナリティの内実についての分析の不十分さや、辺境と都市のアボリジニの断絶性を強調するあまり連続性への目くばりが不足しているなど若干の問題点がみられる。こうした問題点はあるが、鈴木の論文は、生活史を中心とした具体的なデータにもとづいて、民族形成論にもかかわる従来にない研究領域を切りひらく研究のころみと評価できる。したがって、本論文は学位の授与に適切なものと判断する。